

全学共通カリキュラム言語教育の実施と課題

言語部会長 白石典義

本年4月より全学共通カリキュラムがスタートした。言語教育では、英語、初習言語（ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語）ともにセメスター制の導入、コミュニカティブ・コース（COC）やリテラリー・コース（LTC）、言語文化コース（LCC）などのコース制の導入、ペア・クラスの導入を3つの大きな柱とする新カリキュラムを開始した。1992年7月の全学カリキュラム検討委員会答申（水色パンフ）から足掛け約7年、具体的なカリキュラム内容のプランニングに2年以上の歳月を費やし、万全を期してスタートした新カリキュラムだ。授業に出席している学生諸君の生の声、授業を担当している教員さらに各学部の教員の意見を早く聞きたいと思っている。

立教における外国語言語教育は創立以来充実したものであった。戦前には「英語の立教」という評価が流布していたこともあったという。この伝統を継承し発展させることが言語教育新カリキュラムの目標である。この目標に近づくために、言語教育の各研究室では、セメスター制、コース制、ペア・クラスなどといった制度上の変更だけでなく、各セメスター1回以上の担当者連絡会の開催、教員研修会（FD）の開催、授業内容の標準化を図るための統一教科書の採用と作成、統一テストの採用などを検討あるいはすでに実施している。大学における外国語言語教育のあり方が社会的な関心を集めているなか、立教の言語教育新カリキュラムは教育界やマスコミなどに新しい試みとして取り上げられることが多くなっている。しかし、新カリキュラムは、プランニングの段階を終え、実施を開始したばかりである。今後改善を必要とする部分も多い。襟を正して意見・批判を受け入れ、改善のため努力することを惜しんではならないと考えている。

新カリキュラムを実施していく上で最大の制約はコストである。特に、専任人事の制約は厳しい。英語の専任比率は約25%で、本年度は展開944コマのうち536コマを非常勤講師、144コマを嘱託講師に依存している。初習言語の専任比率はほぼすべての言語で30%以下であり、中国語に至っては約20%である。新カリキュラムの柱の1つであるペア・クラスの担当者は週2回の出講が必要となるが、担当可能な非常勤講師を確保することは困難であり、新カリキュラムを展開していく上での不安材料となっている。この問題に対応するために、非常勤講師に代わって嘱託講師を来年度も採用すべく検討が進められている。嘱託講師の採用については、これまで学内で広く議論されてきたが、今後とも教育・研究上の処遇改善等について議論を続けるべきだろう。

現在大学教育研究部に所属している言語教育に携わる教員は、来年度より各学部へ分属することになる。しかし残念ながら、全学共通カリキュラムの言語教育科目を担当しつつ各分属学部の教育にどのように関わるのかといった基本的な点について十分な議論が全学的に行われているとは言い難い。分属する教員は、分属という大きな変化について十分な議論が早期に行われず、また情報も少ないことに不安を感じている。部長会、全学共通カリキュラム運営センター、各学部教授会等の関連する部局は、分属する教員が言語教育新カリキュラムの実施、改善、発展に安心して全力を投入できるよう教育・研究上の環境を確保するべく早急に議論を進めるべきだろう。

言語教育— 初年度の問題点と来年への対応

言語教育科目担当部会

新カリキュラムが4月から始まった。と同時に様々な問題点も出ている。現状と対応策をお知らせする。

[英語] 必修英語は、COCとLTCの二コースを設定し、すでに定められた学部(学科)別のCOC受入率をもとにクラス設計を行っていた。問題は、入学者がCOCを予定受入率を大幅に上回って希望してきたこと、である。文英、理、法6を除いた英語8単位履修の希望者2,651名中、約56%の1,484名がCOC希望であった。抽選で受入者を決定したが、これが今回学生の不評をかかった。

COC=「英語のできる学生のためのコース」という見方が大学の外で一人歩きしていたらしく、5割を超える希望者という結果になった、と見てよかろう。クラス規模がCOC30名、LTC40名台であればそうみられるのも当然であろう。設計意図は全く違っていたのだが、全カリ言語教育の全体が「英語の立教」復活戦略の軸と看做される中では、起こるべくして起こった事態、と受け止めた方がよさそうである。またLTCが相対的に魅力のないもの、と見られてしまったが、LTCの開発意図をもっと周知させる努力も必要である、と反省点が挙げられる。

さて次年度の対応であるが、まずCOCについては、受入率を上げるようになった。98年度は、1) 理学部もCOCを導入する、2) 全学部の受入率を30%にする、の2点が決定された。英語授業のコマ数は決まっているので、英語教育研究室に課せられた宿題は、どこからコマを捻出し、30%実現を図るか、というものであった。その実施作戦は、1) 98年度より始まる自由選択科目の特別COCのクラス規模を少々大きくして、計16コマうかせる、2) 30%実現のために母数を減らす工夫をし—例えば特定の有資格者の履修免除、海外短期集中研修での単位認定、教室での受講ではなく指導教員のもとに長期の自主的学習の成果に対しての単位認定、等の方策を用いる—、1) で浮いたコマのうち9コマをこれに充てる、というもの。以上の結果として30%実現を図る、という英語研究室の案に

対し、各学部が対応を迫られている。

LTCにもいわば「エリート」コースを設け、こちらの魅力をもアピールすることになった。そのため、全入学者を対象にプレイズメント・テストの実施を考慮中である。

[法学部の試み] 法学部では英語以外の言語を8単位、英語を6単位の履修学生(これを英6、逆を英8と略記する)を、全体の20%、120名と見込んでコマ決定を行った。しかし希望者が60名だったので、英8希望者から抽選で60名に英6にまわってもらった。これに初習言語の希望がそのまま叶わないという事情も、今後は重なる可能性がある。法学部の理念的な試みではあったが、クラス設計の必要な必修の言語であるため、運用は若干の困難も伴わざるを得ない、というところである。98年度は、英6希望者を45名と想定して予定コマを決定した。

[初習言語] 希望充足率を上げることが今回の目玉であった。著しく改善されたことは事実だが、過去のデータをもとにしたコマ配分のため、全員の第一希望を叶えることは難しい。希望率の変動を下の表で見たい。今年は昨年比で、中国語とドイツ語が減、スペイン語とフランス語が増、であった。

コマ配分についてすこしだけ紹介しておく。まず全学の初習言語の、規定コマ数を予想希望率で独・仏・西・中に比例配分する。各言語はこれをもとに、授業展開曜日のブロック別(文・法、経、理・社)にクラス規模、クラス数を計算し、端数のところで言語間調整を行う。言語教育研究室の主任たちは、計十数時間もコマ会議を繰り返した。主任会の細かい議を経て、すでに98年度のコマ数が決定された。ちなみに次年度の再履(独はなし)と強化クラスを含む総コマ配分は、独92、仏158、西128、中176、である。

初習全体で浮動コマを用意し、予想が外れた場合に利用する、ということも考えたが、教員確保の点で無理があり、従来どおりクラスを用意して待つ、ということになった。

97年度初習言語別希望率 % (カッコ内は96年度)

学 部	独	仏	西	中	露	朝鮮語
文	13.95 (28.49)	32.72 (22.79)	20.59 (16.91)	30.23 (31.25)	0.97 (0.55)	1.99 (----)
経 済	14.99 (19.02)	26.91 (20.48)	22.75 (17.46)	33.48 (42.10)	0.66 (0.94)	1.20 (----)
理	36.65 (46.90)	28.29 (16.67)	15.14 (10.47)	19.92 (25.19)	---- (0.78)	---- (----)
社	11.60 (18.23)	27.44 (19.53)	26.89 (22.92)	32.04 (38.28)	1.10 (1.04)	0.92 (----)
法 6	15.84 (24.70)	25.46 (20.78)	24.49 (16.18)	31.86 (37.48)	0.74 (0.85)	2.03 (----)
全 体	16.17 (24.70)	27.97 (20.56)	22.72 (17.22)	30.98 (36.90)	0.77 (0.84)	1.26 (----)

総合教育科目の履修動向

総合教育科目担当部会

総合教育科目（2年次生以上に対しては一般教育科目と保健体育科目）についての履修登録は、後期開講の人数制限科目を除き原則として4月時点で前期・後期の開講科目の登録を行うことになっている。ここでは、講義科目について履修規模などの全体的な動向の報告を行うことにする。

各科目群・カテゴリ別の履修登録者数が表1に示されている。概ね予想された規模であるが、科目群・カテゴリの展開コマ数と登録者数とのバランスがとれているとは言い難い。総合A群のA-2、A-4、A-5、総合B群、情報は1クラスの平均規模が200名を超えており過密な環境で授業が展開されている状況が読み取れる。一方、総合A群のA-1、A-3、A-6のように適正規模に近い形で授業を行っている分野もある。このような動向は、特に2年次生以上の旧課程（一般教育課程）の登録者の動向が大きく影響しているようである。2年次生以上は従来と同様に一般教育科目3分野から各12単位計36単位履修する必要がある。総合教育科目（スポーツ実習、その他一部の科目は除く）をこの3分野へそれぞれ振り替えを行ったため、旧課程の学生に対して適切なコマ配分になったとは言い難い状況が反映していると考えられる。従って、今年度の履修状況は移行期の動向として捉える必要があるだろう。

表1-カテゴリ別履修者数

＜講義科目（後期受付の人数制限科目は除外して計算）＞

	履修者数	1コマ平均	展開コマ数	備 考
総合 A	53,975	188.1	287	
A-1	9,058	133.2	68	
A-2	14,164	214.6	66	
A-3	7,884	143.3	55	
A-4	15,511	277.0	56	
A-5	6,807	226.9	30	
A-6	551	45.9	12	
総合 B	2,481	225.5	11	
情 報	5,656	202.0	28	情報科学1、2と情報処理のみ
スポーツ実習	1,906	37.4	51	前期科目のみ

来年度以降の履修動向を考える上で参考となる資料として、履修登録者が確定している前期開講科目の1年次生の履修状況を表2に示す。履修動向を左右する要因としては、学生の分野・科目に対する興味、時間割上の制約、専門学部の設定した卒業要件単位などが考えられる。この資料から色々と読み取れるものがあると思うが、全カリニューズレターNo.4に掲載されている各学部「履修指定単位数」の表と見比べながら、学部の教育理念が履修動向に反映されているかどうかを検討して頂きたい。

表2-1年次生カテゴリ別前期科目履修者数

＜講義科目＞

(5月1日現在) 学 生 数	文 (779)	経 (914)	理 (246)	社 (546)	法 (638)	合 計 (3,123)
総 合 A	2,222	2,485	653	1,591	1,794	8,745
A-1	288	186	55	86	205	820
A-2	568	871	105	753	722	3,019
A-3	493	267	69	173	207	1,209
A-4	660	797	305	521	572	2,855
A-5	203	327	118	55	85	788
A-6	10	37	1	3	3	54
総 合 B	89	156	73	166	393	877
情 報	682	404	186	338	599	2,209
情報科学1	661	375	145	308	583	2,072
情報処理1	21	29	41	30	16	137
スポーツ実習	未集計					

＜学生一人あたりの履修科目数（履修者数/学生数）＞

	文	経	理	社	法	合 計
総合A	2.85	2.71	2.65	2.91	2.81	2.80
総合B	0.11	0.17	0.30	0.30	0.62	0.28
情 報	0.88	0.44	0.76	0.62	0.94	0.71

→ 講義科目のみ、演習科目を含めると(2.85)

最後に全カリも含めた1年次生の学部別平均履修単位数を表3に示しておく。なお、全カリ科目については後期開講の人数制限科目は含まれていない。また、()内の数字は、1996年度の対応する科目の平均履修単位数である。今回のカリキュラム改定は、専門教育の充実を視野に入れつつ行われたものであり（全カリ準備委員会1994年10月31日答申）、一般教育課程から全カリへの移行は専門教育カリキュラムの改定も連動して行われてきたはずである。

四年間一貫教育と専門教育の充実という観点から、各学部の取り組みが履修動向にどの様に反映されているかも検討を願いたい。

表3-1年次生学部別平均履修単位数

	文学部	経済学部	理学部	社会学部	法学部
総 合	13.9(28.1)	17.3(28.3)	18.1(26.5)	19.0(28.0)	16.3(28.2)
言 語	11.0(9.0)	10.0(8.0)	9.1(8.4)	10.0(9.7)	9.7(9.0)
専 門	15.5(9.8)	22.3(19.1)	22.6(20.7)	4.0(7.7)	12.9(6.2)
他学部	0.0(0.0)	0.0(0.0)	0.0(0.1)	0.1(0.0)	0.1(0.1)
講 座	2.6(3.2)	0.2(0.3)	2.6(1.4)	0.5(0.4)	0.4(0.6)
合 計	43.0(50.1)	49.8(55.7)	52.4(57.1)	33.6(45.8)	39.4(44.1)

() = 1996年度1年次生の平均履修単位数

総合 → 一般教育科目3分野+保健体育

言語 → 語学

以上示したのは、全体的な統計資料であるが、その他にも、特定のコマや特定の担当者への履修者の集中度、開講曜日・時限による履修者数の動向などについて、現在分析をおこなっている。また、授業状況などについて、担当者や学生に対する追跡調査を行う準備も進められている。これらの資料を、授業環境の改善やリベラル・アーツ教育充実のために役立てていきたい。

「全カリ」の授業風景

本年4月、長い準備期間を終え全学共通カリキュラムが全面的にスタートしました。まだまだ改善すべきところの多いカリキュラムですが、今回実際に授業の現場に立っている教員と学生の生の声を載せてみました。全カリを理解していただく一助になれば幸いです。

総合A群「美術論演習」を学ぶ

文学部史学科3年 齊藤 純子

私はこの大学に入学して3年目になるが、今年から新たに「全学共通カリキュラム」が導入された。「全カリ」と略されて私達にもかなりなじみ深くなってきているが、戸惑ってしまうことも多い。やはり、その一番の原因は半期ずつになったことである。これにより、殆ど欠席できなくなった、レポートや試験が増えたなど、私達学生にとってはかなり厳しくなったと思う。また好きな授業が半期で終わってしまうのも淋しい。もちろん、個性的な授業が増えたり選択の幅が広がったなどの良い点もあるけど、慣れるまでかなり時間がかかりそうである。

例えば、私は演習科目のひとつに、名取先生の「美術論演習」を受講している。西洋絵画についてのテキストを用いているが、内容は西洋美術史についての専門的な授業なのでかなり難しい。しかし、美術に興味のある人にとっては最適の授業だと思う。一方、スライドを使用するため真っ暗になってしまい、眠気を誘われる人も多い。私はこの授業を通して、美術史を学ぶ際には単に美術作品のみでなく、文学、宗教、歴史などについての幅広い知識が要求されることを実感した。非常にためになるので、後期もぜひ受講したいと思っている。

総合B群「進化」を学ぶ

理学部化学科1年 寺林 健

「進化」の授業についての感想についてですが、素直に言うと、生物全体の進化の過程を順序立てて、授業が行われていくものだと思っていましたが、実際は宇宙の誕生から生命の発生までは良かったのですが、急に恐竜にいたり植物にいたり全くながりとものが感じられなかった。恐竜にしても、どのように生物が陸に上がり、発展して恐竜になったのか、また、恐竜の内でもどのように分化していったのかなどもくわしくやってほしかったというのが実感です。しかしながら、多数の先生方がそれぞれの専門分野を話されていたので、そういう点においては、先生方の個人的な考え方を聞けたり、新しい発見なども出来る

ので、おもしろい授業であると思います。また、さらに付け加えるならば、もっと広い分野を扱ってほしかったということである。例えば、恐竜や植物などは、「進化」というものを語る際には、よく使われる。しかし、昆虫の進化などの普段扱われない分野を取り入れてくれるとよかったと思う。その点においては、進化という考え方に基づく宇宙の創生から地球の誕生の授業は面白味があった。

基本的には、大変興味深い講座であったのは間違いない。ただ、授業は文系にあわせたものであったので、理系の自分としては、少し物足りなさがあった。

総合B群「進化」の授業風景

理学部教授 岩槻 邦男

この授業、はじめ準備してもらった講義室は狭過ぎて、急遽無理をして変更してもらった程の盛況である。ただし、最期まで立ち見の人がいるほどの数の人が出席するのは、出席票に丸を付けるためのようで、私語ははじめよりは減ったものの、ゆっくり居眠りしている人や、他の仕事に精を出している人は少なくない。進化という理科的な思考法を文科系の人が経験するのに良い機会であるが、残念ながら、その機会を活用できている人は多数派ではない。大人数授業になったために、連続講演のようになったのは残念だが、担当の教員のほうが熱心にはほぼ毎回全員出席で、それが学生に刺激になっているのは、総合B群の授業としては効果が上がっているのだろうか。

教員の側で一般教養の授業に経験豊かな人は1人だけである。だからというわけでもないだろうが、毎回の話の内容は少し難しすぎるかもしれない。教員には面白くても、1年生の学生向きにこのままでよいのかどうか、その点はコーディネーターが気をつけねばならないことかもしれない。少し難しいといっても、専門用語が時々出てくるくらいで、それも良く聞けば解説されており、コピーやスライドなどでイラストされてもいるので、真面目に聞けば理解できないことでもない。真面目に聞くのには、真面目すぎる講義が続くのが、難といえば難なのだろうか。

「英語」を学ぶ

社会学部観光科1年 榎本 康一

現在、わたしはCOCというクラスに在籍している。今まで、自分は受験英語しか習っておらず、会話中心の英語というものを習ったことがなかったので、最初はこの授業形態に多少なりとも抵抗があったのはもちろんである。しかし実際に習い始めてみるとやはりおもしろく、本来の英語の勉強・楽しさというものを肌で実感できる。基本的に自分は英語が好きなので、本場の英語とともに外人の教師に習える機会を持てたことがとても貴重であり、ありがたく思える。

今、授業ではテキストを中心に進んでいるが、自分としてはテキストというものをなくして、もっと自分の意見を言えるようにあるトピックスを教師・学生とともに決め、発言の機会をもっと増やしていったら、より楽しく英語を学べ、日本人に特有の発言が苦手であるという部分も改善されるのではと思う。

いろいろと書かせてもらったが、これはあくまで私的な意見であり、周りの人が思っていることとは異なる部分が多々あると思う。が、自分のクラスを代表して一言いうならば改善する部分は多少なりともあるが、皆英語というものを楽しく学んでいるということだろう。

「ドイツ語」を学ぶ

経済学部経営学科1年 池田 ゆめみ

今、ドイツ語の授業は小学校を彷彿させるような小さな教室で、しかもそれでも窮屈に感じようのないほどの人数で進められています。「何だかサボれなさそうな授業だ。」というのがその第一印象でした。しかし、これ迄を振り返って結果的に私が1度も欠席していない理由は実に様々である気がします。

ここでは、単にドイツ語の習得に終始するのではなく、例えば「ドイツと言えば〇〇。」とか当国の地域的な話題、欧州に於けるドイツ語圏についてその言語をめぐる民族的問題など、多面的にドイツにアプローチしています。そうした中で自然に生まれてくるドイツへの関心が、言語としてのドイツ語へのそれをも高めているように思います。

そして私がもう1つ感じることは、90分間という長い時間、その乗り切り方です。確かに、新しいことづくめの内容で90分間そこに全神経を集中させることは恐らく無理なことでしょう。そこでこの授業では、前半と後半を区切り、間に休憩を挟んだりビデオを観たりしているのですが、そのおかげで非常にテンポの良い授業が展開されているようです。つまりこの授業を一言で言えば、無理のない内容を無理のないペースで進めている、といったところでしょうか。

今後、コースが2つに分かれ、コミュニケーション中心のコースかリテラリー中心のそれを選択することになりますが、どちらも捨て難い、そう感じるのは私だけではないと思います。

公開シンポジウムのお知らせ

テーマ「全カリ・総合Bの可能性を探る」

全カリ総合教育科目の「目玉」は何といても「総合B」である。全カリ初年度である本年度は、7テーマ12コマでスタートした。学生の人気も高く後期受付の1コマを除き総履修者数は2,481名である。一つのテーマを様々な角度から、様々な形態で、様々な分野で活躍する方々と共に授業を創っていく「総合B」には、大きな可能性が秘められている。

そこで今回の全カリ公開シンポジウムは、この「総合B」をテーマに掲げるこのとにした。学生、教員、職員、その他大勢の方に参加いただき、これからの可能性について大いに語っていただきたい。

日 時：1997年11月18日（火） 16：30～19：00

場 所：9号館大教室

講 師：総合B担当者、履修学生、学外講師に現在交渉中

「Q&A あなたと私の全カリ履修」

全学共通カリキュラム教務課

今年の履修登録は、正直いって混乱を極めました。予測された事態ではありましたが、2～4年次生は新科目と旧科目の違いに戸惑い、1年次生は教えてくれる上級生のいない不安から —いわば新学部状態？— 質問の嵐が4月の多忙な教務課と履修相談会場を吹き荒れていたという印象です。この余波は津波となって5月始めの履修登録修正会場を襲いました。

では、主な質問を取り上げてみましょう。

Q1：履修要項で『同一科目は1学期に2つ以上履修できない。ただし・・・』と重複履修について書いてある時に・・・

- ①担当者が異なる場合も1学期に1つしか登録できないのですか？
- ②学期を変えれば履修できる場合、講義内容が前期・後期で同じでも履修できるのですか？
- ③もし2つ以上単位が修得できた場合、どちらも卒業要件単位になりますか？成績は良いほうが成績証明書に載るのですか？

A1：ここでいう同一科目とは『科目名称（番号も含む）と単位数が同一の場合』を指します。

- ①の場合、内容等は異なりますが、同一科目ですので履修登録できるのは1学期に1つだけです。
- ②の場合、内容が同じでも前期・後期に1つずつ履修するならば、履修登録できます。修得した単位の扱いについては③へ譲ります。
- ③のうち修得した単位については、先に修得した1科目のみが卒業要件となります。ただし、成績証明書には、全ての修得単位の成績が記載されます。

Q2：去年までの科目と同じ先生の科目を履修したいのですが、卒業要件単位になりますか？

A2：一般教育科目の旧科目と新科目は「日本国憲法1, 2」を除き、全く別の科目として扱います。また、修得した単位は、各分野の選択科目となります。

Q3：現在3年次生なのですが、上限の28単位分を全て前期に履修登録してもよいのですか？

A3：基本的には、一般教育科目（いわゆる三分野）については、合計が28単位を超えなければどちらの学期に偏っても大丈夫です。しかし、例えば、総合B群（相当）のように、分野に関わらず、1学期に1つしか履修登録できない等、制限されている場合がありますので、履修規程をよく確認しましょう。

Q4：1年次生で、新座の日に割り当てられている「情報科学3, 4」があるのですが、この他に「情報科学1」等を履修してもよいですか？

A4：「情報科学1～5」については、別の科目であればいくつ履修登録してもかまいません。ただし、1度単位を修得してしまうと2度と履修できなくなりますので注意して下さい。

Q5：総合教育科目で学部の指定単位数のところを読むと、「全体から」ってあるんですが、総合A群は1学期に6単位、総合B群は1学期に2単位までですよ。『全体から』に回す分の単位はこの制限とは別に考えてよいですか？

A5：いいえ。総合A群は1学期に6単位、総合B群は1学期に2単位以上履修すると「全カリ上限オーバー」というエラーになってしまいます。

Q6：第一週の授業に出席して人数制限科目を登録したのですが、別の科目に変更したくなりました。どうしたらよいでしょうか？

A6：人数制限科目は、履修登録の日程上、追加募集は行いませんので、履修登録の取り消しや他の科目への変更はできません。授業内容をよく読んで選んだと思いますので頑張ってみてください。

Q7：後期開講の人数制限科目を履修したいのですが、前期の登録の際にはどうしたらよいですか？ また、履修できなかった時はどうなりますか？

A7：後期第1回めの授業に出席して履修登録を行うこととなりますので、日課表で曜日・時限を確認して空けておきましょう。別の科目が登録されているとか、上限を超えるなど履修規程が守られていない場合は、人数制限科目を履修できません。希望者が多すぎて履修できなかった時は、後期の修正期間に届（A）で登録できる総合（一般）教育科目の追加を認めます。



今年度は、授業を行う側も受ける側も半期ごとの履修に慣れておらず、前期・後期に内容の続く同一科目を開講して継続履修を促していたり、同じ内容の同一科目を（保険？）登録したり、後期に登録しながら前期に授業・試験を受けて無効になったりと半期開講の良さを生かしきれていないようです。

履修要項の作成にあたっては、一文ずつ吟味し、できるだけ誤解のないように努めたつもりでしたが、質問の嵐はそんな私たちの「やったつもり」を見事に吹き飛ばして（蹴飛ばして？）くれました。上級生は下級生に教えたがり、下級生は上級生に聞いたがる、書いてあることについても、窓口に来て読み取った内容を口頭で確認したがる — という現在の学生気質を垣間見たこの春の履修登録でした。

研究室だより

一つの可能性としての多文化主義による外国語教育

日本語教育研究室主任 田 中 望

いま、大学の外国語教育は、さまざまな意味で変革を迫られている。その時期に、大学における外国語教育の存在理由をもう一度考え直してみるのも無用ではあるまい。

大学の外国語教育には大きく分けて二つの目的があると思う。一つは、外国語の学習を媒介として、一般的な学習能力を高めることと、母文化の相対化を体験することである。この場合、外国語の運用能力を身につけること自体が目的ではなく、外国語はいわば学習の材料になっている。外国語教育をこのようにとらえる考え方は、中等教育つまり高等学校までの外国語教育のあり方の延長線上にあるといえる。

もう一つは、大学での学習に不可欠の道具としての外国語の教育で、現在では対象言語は学部レベルではほぼ英語に統一されているといってもいいだろう。外国人留学生に対する日本語教育も従来はこのパラダイムによって行われていた。

このような大学における外国語教育の枠組みは、まず第一の目的に関して、対象言語の構成が時代の要請によって、変化せざるを得なかった。主として、第二外国語について、これまでのヨーロッパ語中心の構成から、アジアの諸言語に社会の要請も、学生の関心も移ってきた。そもそも第一の目的に関しては、対象言語は何語でもかまわないのであって、たまたまそれがヨーロッパ語であったのは、大学および日本全体の知の編制がヨーロッパ中心主義をとっていたためにすぎない。

第二の目的に関しては、大学での学習に必要な能力をすでに大学入学時に身につけている学習者が増えてきたことが問題となる。必修科目として行う以上他の学習者とのレベルの均等化が必要になるが、それをどのようなかたちで行うか、授業免除あるいは単位認定などの方法すら考えられている。外国人留学生に関しては、もしその日本語能力を日本人学生と同等と期待するような同化主義的な考え方に立てば、この目的のための日本語教育が際限なく必要になってくる。しかし、多文化主義の考え方に立てば、現在の大学に入学してくる留学生の日本語能力はすでに十分すぎるほどであり、いまさら外国語として日本語を課すよりも、その日本語能力を実践の場で磨くために、一般の授業を多くとったほうがより有効である。このことは外国人留学生を特別扱いして隔離しないという意味でも適切であるし、また日本人学生と交流の機会が多くなるという意味でも多文化コミュニティ化の要請に沿うものである。

このような状況のなかで、大学での外国語教育に関して、いま考えるべきなのはここであげた第一の目的、とくにその中でも母文化の相対化を再度評価し、それをカリキュラムの中に位置づけることであろう。ただし、ここで母文化というのは、これまでの外国語教育で当然のことと考えられてきた、国民国家あるいはエスニシティにかかわる文化だけではなく、ジェンダー、エイジ、アビリティなど、より広い範囲でとらえ、それぞれについて自分の属する文化と異なるものとの関係を考える多文化主義の観点に立つ必要がある。

たしかに第二の目的に関しては、レディネスとして十分な学生がいるかもしれない。しかしその学生も母文化の相対化に関しては十分だとはいえないように思う。なぜなら、母文化の相対化は高等学校までの外国語教育で確実に行われているとはとてもいえないし、とくにジェンダー、エイジ、アビリティなど多文化社会の問題はシラバスの中にはいってすらいないからである。

このようにとらえたとき、外国人留学生に対する外国語教育もこの枠組みのなかで考えられるべきであろうし、多文化主義カリキュラムで学習する日本人学生とともに学習することで、その効果はとくに上がるはずである。また、逆に留学生がいることが日本人学生の母文化の相対化にも役立つことになる。

広い意味での文化の相対化を目的として、それを外国語教育として行う方法にはいくつかのものが考えられるが、当面英語能力の高い日本人学生、日本語能力の高い外国人留学生に対しては、content-based instruction がもっとも適しているであろう。content-based instruction では、まさに内容、すなわちここでは広い意味での文化をそれぞれ英語、日本語という媒体にのせて教育する。簡単にいえば、日本人学生に対して英語のみを使って、留学生には日本語のみを使って多文化的内容を教えるのである。

ただし、この方法では、日本人と留学生とが同じクラスで学習することによって、多文化的内容を効果的に身につけることができない。したがって、将来は多文化カリキュラムを外国語教育から切り放して、総合教育の中に位置づけるべきであろう。

多文化教育に関するこのような展望のもとで、具体的にはまず英語教育と日本語教育にかかわる教員を中心として、共同で試験的カリキュラムを開発することが重要であろう。

[声]の欄

「嘱託講師」のこと

「声」の欄の原稿依頼を受けてから、何をテーマに書けばいいかと一週間ほど悩みました。新カリがスタートして、第一学期目の終了を目前にし、私自身を色々な面で助けてくれた嘱託講師に関してちょっと話をさせて頂きたいと考えています。

全カリとは一步離れています、嘱託講師は不可欠の教員であることはだれも疑問をはさむ余地はないと思います。特にペアクラス制度を実施するためには彼等の存在がなければ担当者の時間割は非常に苛酷ならざるをえないと思います。嘱託講師はクラスを担当するだけでなく、新カリの向上に必要な専門的知識を提供してくれる彼等は今後のカリキュラム進化にはとても重要です。

今年4月から出発した枠で、英語9人、ドイツ語4人の嘱託講師は立教大学の正門をくぐりました。この13人は修士は勿論、中には博士号まで挑戦している人物もいますし、複数の国での経験を持っている人物もいます。全ての嘱託講師は様々な教育や人生経験を生かして、立教大学の教員の多様性に大きく寄与をしています。また、私の教授法は嘱託講師の方々のアドバイスやアイデアで恩恵を受けています。この新しい枠を開いてからまだ一学期しか経ていないのに、もう既に立教大学の言語教育にはこの13人は不可欠であると思うしかありません。1998年のためにも嘱託講師の数を増員しようという声が高くなったことはこれを証明することに他なりません。

以上のように、この短期間に嘱託講師の存在は全カリだけではなく、立教大学全体のためのメリットを十分に示したと言えます。しかし、一方通行ではなく、大学側も嘱託講師のニーズを考慮すべきであると思います。残念なことに短期間しか共に仕事をしないことは事実ですが、この短期間に出来る限り全カリのメンバーとして、また全学の教員の大切な同僚として、ギブ・アンド・テークで平等な関係を築いて付き合えたらお互いのメリットは大きくなると思います。教員の我々だけではなく、授業に与える影響を考慮すれば学生にもこれは間接的にプラスになるでしょう。

私の最初の大学でのポジションは嘱託講師のような年数制限のある席であったために今日このテーマを選択してペンを執ることにしました。この経験があるために私は嘱託講師の事情を人一倍興味深く、またセンシティブな目で見えています。私の個人的な意見ですが、嘱託講師は立教大学で教鞭を執っている期間は短いけれども、出校している間はプロフェッショナルな同僚として接し、できるだけ専任との差を縮小させるように考えるならば、お互いのメリットは大だと私は思います。

(MC)

上級生の全カリへの反応

ちょうど停車中の満員電車で飛び乗った。ところがすぐ次ぎにゆったり座席のある始発電車があって、しかもそれが設備のよい新型車両だった。こんなとき先発の電車に乗ってしまった人は、かなり口惜しい思いをすることになる。一般教育課程の最後の学生たち、つまりことしの2年次生たちは、この乗客に似ている。全カリを構想していく過程で、在学生には入学時の規程を適用するという方針は、こうした大学の制度改変の際の慣例で仕方がないことと考えられた。2年次生がおおいに羨ましがるとすれば、それは全カリの計画の成功のあかしだという楽観論もあった。しかし、その2年次生たちの身になってみるとどうか。

全カリがスタートして1学期が終わろうとするある日、2年次生のクラスで意見を聞いてみた。

ともあれ、かれらがいちばん反応した点は、一般教育科目が3系列36単位必修であったのが、全カリ総合教育科目24単位になったことである。「ずるい！」の一声にはじまり、「うらやましい」「強制がへり、選択の幅が広がる、自分が本当にやりたいことや専門に時間がかけられそう」「履修する単位数に違いがあるのはちょっと問題ではないか」「納得できない。移行が難しいのをなんとかするのが学校の仕事じゃないですか。変えるなら全部変えてください」ということになる。

中身については、昨年度の「一般」と比べて、「バラエティに富んだ科目展開はいい」が、「名前は変わっても授業自体はとくに変化なし」と言い切る声もすくなくない。こんな意見もある。「今の立教の教育そのものに影響を及ぼすとは考えにくい。本当に教育を改革したいなら、留年制度を取り入れ、一方学生から見た教授の評価を学校が把握することが大事だ。」

その結果、新制度と旧制度を全体として評価するとなると、絶対的に新制度がいいという答えはでてこない。「全カリから得られるプラス、それを受けられないことに何か保障があるか」という強い意見はあるものの「どちらかといえば新制度」から「どちらがいいとは一概には言えない」を経て、「英語を除いては、現状では旧制度」「今のままでよかった、新制度にはなじめない」という意見分布が見られる。

(ここに紹介した意見は人数もわずかであるし、最近実施された大規模のアンケートを先取りして全体の縮図になっていると主張するつもりはない。)

(T.K.)